

十勝川をひとつの流れに

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、
そして未来へ

用語

さくいん



昭和22年(1947)の芽室川合流点あたりの十勝川。曲がりくねり、何本にも分かれている。(黄色い線は、今、堤防があるところ)

自然なままの川は、平野部では大きく曲がりくねり、また、何本にも枝分かれして流れることもよくあります。

かつての十勝川は、とくに、芽室・音更・帯広・幕別のあたり(中流部)で、何本もの川すじを持ち、大きな洪水があると本流が変わることもありました。

これでは、人が暮らし、畑にした所がいつ川になってしまうかわかりません。

そこで、流れをできるだけ一本にまとめ、堤防で囲むことで、洪水になっても畑や住宅地へあふれ出さないように、十勝川などの川はつくりかえられていきました。

これは、川の流れをよくし、川が流せる水の量をふやすことにもなります。



昭和39年(1964)におこなわれた、川の流れを変える工事。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

芽室町の中島では

芽室町の中島(毛根中島)では、芽室川の合流点から上流で、十勝川が2本に分かれていました(今の流れと、芽室川支流の古川:旧御影川。古川橋のかかる川)。

昭和37年(1962)のころには、だいたい今の流れが中心となっていました。まだ曲がりが大きく、芽室川合流点前後では大きく2本に分かれていました。洪水が起きれば、流れが変わり、その流れの変化で川岸がこわれるおそれがありました。

そこで、川の流れをスムーズな一つの水路でつなぎ、十勝川を落ち着かせようという工事がおこなわれました。

ゆるいカーブでつなく

無理にまっすぐにつないでも、川自体が曲がろうとすれば、川岸はこわれていきます。そこで、毛根中島の工事では、それまであった川の流れを調べ、ゆるやかなカーブを持った水路をほることにしました。

昭和38年(1963)には、芽室川合流部のおよそ2.5kmで、昭和39年(1964)には、その上流のおよそ1.5kmで、それぞれ新しい水路がほられました。

このような工事が各地でおこなわれることによって、洪水となれば暴れて、人の暮らしをこわしていたいた十勝の川が、今のような落ち着いた流れになってきました。



平成17年(2005)の芽室川合流点の十勝川。オレンジ色の点線が昭和38年(1963)にほった部分。水色の点線は、工事前のおもな川の流れ。